

長谷川成一監修

浪川健治・佐々木馨編

『北方社会史の視座——歴史・文化・生活——』第二巻

高橋 博

『北方社会史の視座』全三巻シリーズのうち、今回新たに刊行の本巻は、前巻（第一巻）と同様、道南・北東北史上における地域的特質について、従来の歴史学・考古学の枠に捉らわれず、体系的・総合的に追求した論文集である。本書の構成は、政治・社会に関する論文五点・研究ノート一点・コラム二点を収載した「歴史分野」と、学問・思想・宗教に関する論文八本・コラム一本を収載した「文化分野」から成り、その内容は次の通りである（敬称略）。

はじめに

浪川 健治

◎歴史分野——近世における地域と国家

豊臣・徳川政権移行期の北奥羽大名

——慶長年間、南部家の動きを中心に——

千葉 一大

蝦夷地における異民族との接触と衝突

——一七世紀後半の寛文蝦夷蜂起を中心として——

市毛 幹幸

コラム1 北の商人像

阿部 綾子

消えた松前 ——未発見の津軽領元禄国絵図に関する小考—— 本田 伸

研究ノート 後期津軽領の災害対応 白石 睦弥・長谷川成一

コラム2 秋田藩木山方吟味役・賀藤景林家文書の発見

加藤 衛拡

北羽都市の生活と習俗 ——「秋田風俗絵巻」の世界—— 金森 正也

幕末の北奥社会と海峡を渡る女性

——弘前藩領大光寺組田中村「かん」の場合——

浪川 健治

◎文化分野——地域固有の文化の形成と思想

海を渡った宗教・信仰 ——有珠善光寺を手がかりに—— 佐々木 馨

北方各藩における儒学の展開

中村 安宏

弘前藩宝暦改革の主導者乳井貢の思想と実践 小島 康敬

安藤昌益の思想 ——新発見の「天地象図」から見えてくること——

若尾 政希

コラム3 江差商人・関川平四郎の俳諧活動

桜井 拓郎

北奥羽地域における神仏分離 ——秋田藩・盛岡藩を中心に——

岩森 譲

近代教育の中の洋楽受容 ——文明開化を考える一環として——

北原かな子

死亡広告からみた秋田県内の葬儀の変化 ——骨葬を中心に——

「歴史分野」所収の諸論文および研究ノートは記載順に、関ヶ原合戦から大坂の陣までにおける盛岡藩南部家の軍役動員・徳川將軍家との主従関係の構築や家臣団統制（千葉）、寛文蝦夷蜂起前後における松前藩の対アイヌ関係秩序のあり方（市毛）、弘前藩の元禄国絵図の体裁・表現様式・記載内容などの復元作業（本田）、同藩の地震・火災・津波などの災害対策（白石・長谷川）、風俗絵画を通して見た秋田藩領内年中行事の生活史的意義（金森）、幕末期における弘前藩から函館への若手女子労働力移動の実態（浪川）について、それぞれ考察がなされている。「文化分野」の諸論文については順に、古代〜中世における蝦夷島への天台宗伝道の思想的意義（佐々木）、弘前・盛岡・秋田藩における儒学の展開・儒学者の著作内容・三藩の相互比較（中村）、弘前藩の宝暦改革者乳井貢の思想信条・思想的背景・改革挫折後の思想境地（小島）、安藤昌益が残した著作の分析を通して見たその思想形成の過程（若尾）、秋田・盛岡両藩における神仏分離の実施過程と特徴（岩森）、文明開化期の東奥義塾における英学を中心とした洋学受容のあり方（北原）、明治から現在までの秋田県内での葬送儀礼の変化（丸谷）、青森県出身の作家長部日出雄の作品に登場する盲目巫女イタコを通して見た津軽の風土（郭）に関して、それぞれ考察がなされている。

評者は近世史が専門であるので、「歴史分野」の中で特に印象に残った千葉一大「豊臣・徳川政権移行期の北東北大名」につき感想を述べる。

同論は表題の通り、北東北の名族南部家が豊臣政権から徳川政権へ移行する重要な節目となった慶長年間（一五九六〜一六一五）の政治動向を追ったものである。関ヶ原合戦の奥羽版ともいべき「慶長五・六年の動乱」、すなわち上杉景勝包囲網における南部利直ら近隣大名の軍役動員や領内一揆の発生、「取次」と呼ばれる徳川吏僚との人的関係の構築、慶長十七年徳川幕府の「三箇条条書」への署名と同年將軍徳川秀忠の江戸南部屋敷への「御成」などをキーワードに、この時期の盛岡藩政史研究の進展を妨げていた要因の一つである一次史料の欠如という点を克服しつつ、その歴史的意義を検討し、果ては大坂の陣における南部利直参陣にまで言及するという内容である。特に、この時期の「取次」については、毎年のように各研究者により論文が発表され、新たな視点が提示されている分野である。筆者の千葉氏も南部家の「取次」を早く明らかにされたいところであろうが、限られた史料に深入りはせず、余程の確証がない限り、断定的な表現は避け、あくまで可能性に留めておく。本人にとつては当然のこととは言え、その慎重かつ厳密な史料批判の態度の一端が感じられるところであった。加えて、徳川秀忠の南部邸御成における利直嫡子の初目見を、徳川將軍家との主従関係構築のためのイベントと見なし、この日行われた八戸直政ら南部家の重臣三名の御目見により、この三名が利直の家臣として認識され、かつ幕藩体制下の中の大名家臣Ⅱ陪臣として武家のヒエラルキーの中に組み込まれると論じられたのは、従来にはない視点として貴重である。在地支配権の強い家臣を領内に多数抱えた盛岡藩に、この「御成」行事がその後も必要とされたのか、されずに知行を媒介とする大名・家臣間の主従関係の整備により陪

臣の力が弱まり、寛文の証人制度の廃止へと移行していくのか、「御成」行事が寛永四年の八戸直政の遠野移封の遠い要因となったのかなど、興味は尽きないところである。

前巻では道南・北東北地域の政治行政・産業流通・地域間交流・異民族支配などの諸問題が、原始古代・中世から近世中後期までの広いスペースで取り上げられ、これらの諸論考も均等に振り分けられていた。しかし、本巻は編者の一人浪川健治氏が巻頭でその編集意図を「近世を中心とした時系列の歴史とそれが育んだ空間世界が生み出した多様な文化のあり方のなかに、多元的な北方社会像を結ぼうとしたもの」と述べている通り、両分野とも考察の中心が近世全般における蝦夷地および弘前・盛岡・秋田の北奥三藩に据えられているのが特徴的である。所収論文は特定の研究課題やフィールドに偏ることなく、巧みに配列されているのに加え、各執筆者による新発見の史料などからの最新の研究成果が導き出され、その精度の高さは言うまでもない。またコラムについても、弘前藩の御用商人の活動（阿部）、東北森林管理局旧秋田営林局文書等の調査結果（加藤）や漁港江差における俳諧文化（桜井）など、各論文に取り上げられていないテーマが設定されており、通読しても何ら違和感を感じさせるものはない。その点、編者の力量が感じられるところである。とりわけ「文化分野」に関しては、近世の北方地域に支配・被支配階級を問わず醸成された知の営みや習俗・生活感覚が、幕末・維新の変動期を経てどのように近現代に継承されていったのか、明確な問題意識のもと編集されているのがよく感じられた。このように、本巻は極めて充実した内容となっているので、是非一読をお勧めしたい。

（A5判、四二〇頁、二〇〇八年二月、清文堂出版、価格四七二五円＋税）
（たかはし・ひろし 宮内庁書陵部研究員）